

目的 食物の嗜好について第1報で、年代差、性差による嗜好のちがひ、および親子あ
るいは夫婦間の嗜好の相関について報告したが、本報では、嗜好における食物間の関連性
および、食物の嗜好評価の要因について調べた結果を報告する。

方法 40種の食物について、当短大生50名とその母親を対象とし、Hedonic Scaleの5点
法により嗜好度を調べた。その評価の要因として、直接食物の嗜好に関係する、味、香り、
外観、テクスチャーの4種に、更に栄養、習慣、心理の3種を加え計7種の中から、嗜好評
価に最も関与する順に1, 2, 3と順位をつけさせた。

結果 40種の食物に対する嗜好は前報同様、短大生群は和洋中華風型であり、母親群は
和風一辺倒型であった。その嗜好評価で、特に真および肉を素材とする食物に対して、両
群とも嗜好度の標準偏差値が他の食物に比し大で、嗜好のバラツキが同立つので、更に関
する食物3種、肉のもの4種を選び出し、それらの嗜好の相関行列を求めた。それによ
り短大生群と母親群とはかなり異なり、特に短大生群では真料理と肉料理との間に全く
相関関係が認められなかったが、真料理間、肉料理間にはそれぞれ有意に相関がみられた。
すなわち、短大生群では真も肉も好む人は非常に少なく、しかも真料理に対する嗜好度
特に低いこと等から、肉料理一辺倒の人かかなり多いことが考えられた。その他の食物間の
相関については検討中である。次に嗜好評価の要因について、40種の食物の総計では、両
群はほとんど同じで、嗜好評価“好ま”の場合は、味、香、外観、テクスチャー、栄養、習慣、心理の順に
約40%、14%、11%、12%、10%、1~13%、6~7%、6~8%の割合の貢献度であった。“嫌”では味と心理が大であった。